



八千代市郷土歴史研究会

会長 村田一男

事務局 八千代市勝田台3-24-10 牧野方

**8月15日(日)例会**

PM1時 市郷土博物館にて  
調査研究情報交換

**お知らせ**

9月12日(日)午後1時より

**拡大役員会**

- 於：八千代市立郷土博物館
- ・「史談八千代」29号の原稿締め切り
- ・編集調整打合せ

9月19日(日)午後1時より

**例会**

- 於：八千代市立郷土博物館
- ・展示作品企画提案
- ・「史談八千代」29号編集・版下の作成開始

10月3日(日)午後1時より

**例会**

- 於：八千代市立郷土博物館
- ・文化祭展示制作作業
- ・「史談八千代」29号最終校正

10月17日(日) **バス見学会**

集合：午前8時 勝田台北口

- ・行先：埼玉県比企郡川島町遠山美術館 = 流山市一茶双樹記念館 = 野田市上花輪歴史館
- ・申し込み〆切は 9月例会時

11月14日(日)午前9時より

**例会**

- 於：八千代市立郷土博物館
- ・文化祭展示制作
- ・自分の発表作品のない方も協同作業をお願いします

その他の文化祭準備作業日程は、9月例会時にお知らせします。

市民文化祭参加

**「郷土史展」**

11月20日(土)

午後1時~5時

21日(日)

午前9時~午後4時

**旧高津村のすがたと人々**

勝田台文化プラザ2階 展示室

= 例会などの報告 =

5月16日(日)例会

高津山観音寺にて



・20名が参加し、午前10時から 高津山観音寺本堂にて例会を行いました。

・観音寺ご住職のご好意で、元和元年大阪夏の陣で戦死した間宮正秀 = 高秀霊神ほか、旗本の間宮家の位牌の記録調査をしました。

・今回の位牌調査で「寛政重修諸家譜」の間宮庄五郎家の系譜のうち、宗林(間宮正重)、常秀(正秀1615没)、日珠(正勝1671没)と、久庵(正重の父の綱信1609没)、宗三(綱信の先々代か)の戒名が確認され、また、間宮士信は「得成院殿賜布狩衣最正日覺居士」という戒名でした。(藤由美・記)

5月29日(土)

自衛隊習志野演習場内の  
史跡調査

平塚 胖

平成16年5月29日(土)快晴。今日の目的は旧高津村研究の一環として自衛隊の演習場内にある史跡を調査することである。

演習場には事前に目的・住所・年齢等を届け出て許可された者のみが入場出来る。村田会長以下18名が午前10時に自衛隊演習場正門前に集合した。自衛隊の広報担当の隊員が出迎えてくれた。この史跡については6年ほど前に一度調査を実施しており、今回は正式に資料として遺すために行われた。

演習場内は広大なため、あらかじめ目的を知らせていたので、隊員の乗ったジープに先導され、我々は4台の乗用車に分乗し、まず大六天社に向かう。

大六天社は演習道路脇に、鳥居を従えた祠が石段を数段登ったところに坐っている。祠の扉を開いて中を観察した。中には御幣が納められていた。この祠のお守りは岩井氏が行っているとのこと。後日詳しい話を聴取する。

大六天社より今日の主題である馬頭塚へ向かう。3m位の小高い丘(塚)の上に二つの大きな石塔が見えてきた。周りが草に覆われており本当に野原の中の石塔できれいな風景!



馬頭塚には3個の石造物がある。2つは傘付きで金剛像浮き彫りの庚申塔で残りの1つは手水鉢である。早速会員がそれぞれに分かれて石造物の調査に取りかかる。台座の銘文の解読・寸法の計測・拓本などを実施。

作業終了後五月晴れ初夏の日差しを浴びて参加者全員の記念写真をした。



その他の調査として演習場内の高津森・まむし谷等に回り、高さ2mほどの下野牧の野馬除け土手の名残等を確認踏査した。

演習場の中に高津村の一部があり野馬土手など、割合手つかずの状態に残っており、昔の人はこの演習場の中を行き来していた事を想像しながら村田会長のお話を聞いた。

今日の調査にご協力いただいた隊員の方には土曜日の休日にもかかわらず、快くご案内をしてくださいました。我々は感謝のお礼を申し上げ、正午過ぎに散会した。

6月12日(土)～13日(日)  
信濃の歴史探訪の報告

増田俊幸

今年の宿泊学習会は、平成16年6月12・13日に18名参加の長野県松代・小布施方面の研修旅行になりました。

京成勝田駅北口を7時に出発して最初に長野県更埴市にある森將軍塚古墳(国史跡)に行きました。古墳見学用のバスに乗り換えて尾根の上にある古墳を見学に行きました。全長100m余り

の前方後円墳で有明山から北に張り出した標高490mの尾根の丘尾を切断して作られていました。保存整備事業で全面発掘と築造当時の姿への復元が行われ史跡公園になっていました。その後、考古館・県立長野歴史館を見学しました。



昼食を取った後、川中島古戦場八幡原に行きました。ボランティアの方の解説がとても素敵でした。(下の写真左がボランティア)



古戦場の見学の後、長野市内にある善光寺に行きました。木造建築の撞木造としては全国最大級の本堂は迫力がありました。

善光寺の見学の後は、小布施に向かい、岩松院に行きました。岩松院には、北斎下絵で鴻山が描く極彩色の鳳凰図があり、本堂の裏には福島正則公霊廟がありました。

その日の泊まりは、湯田中温泉の星川館でした。

13日は、まず小布施に行き北斎館・日本あかり博物館・高井鴻山記念館を自由見学しました。葛飾北斎が小布施にはじめて来たのは82歳のときでした。以来4回ほどこの地を訪ねました。北斎館には沢山の作品が所蔵されていました。日本あかり館には、信濃及び周辺地域の灯火用具(国有民)が展示してありました。高井鴻山は、京都・江戸にも遊学し、

佐久間象山とも親交があり、書画をよくし時局風刺の妖怪画で知られた偉人で、鴻山没後100年を記念して修築整備されたものでした。

その後、江戸中期よりつづく北信濃屈指の豪商であった田中本家代々の生活文化を展示する博物館に行きました。約100m四方を20の土蔵が取り囲む豪壮な屋敷構えは当時の面影を伝えていました。

田中本家を見学した後は、昼食を取り、その後松代に行きました。松代では、ボランティアの方の案内で、松代城・真田邸・真田宝物館・旧文武学校を見学しました。

松代城は、永禄3(1560)年、武田信玄が上杉謙信の攻撃に備え、山本勘助に命じて築城したものです。



真田邸は、江戸時代末期に、松代藩9代藩主・真田幸教が母お貞の方のために隠居所として建てたものです。

旧文武学校は、松代藩の藩校として八代藩主真田幸貫が、水戸の弘道館に範をとって藩校を計画し、九代藩主幸教がこれを引き継いで嘉永6年(1853)に完成、安政二年(1855)に開校したもので、明治に入り兵制士官学校を併設したが、明治四年(1871)廃藩と共に閉校となりました。

松代の見学で見学は終了し勝田台に帰ってきました。

出発前に心配していた天気も大きく崩れることも無く、長野県松代・小布施の歴史を心ゆくまで楽しみ学習できたと思います。

素敵なコースを設定していただいた会長・副会長・ツアーの方々に感謝したいと思います。



7月18日(日) 例会  
市立郷土博物館にて

16名が参加し、これまで個人やグループで取り組んできた高津に関するもりだくさんの調査報告が資料として配布、披露され、疑問点などを整理し、活発な情報交換をしました。

内容(6と8は調査資料の配布のみ)

- 1.高秀霊神と間宮氏-添付資料:間宮家系図・谷中長明寺の間宮家宝篋印塔銘文
  - 2.ムラ境の民俗-高津のツジキリ・道祖神・咳神さまを追って
  - 3.高津の石造物-供養塔・社寺宝篋物・記念碑
  - 4.廃寺正福寺に関連する石碑や霊園内の墓碑
  - 5.高津西霊園墓地の旧家の墓碑と屋号
  - 6.高津村の屋号リスト(江戸時代の文書に記された屋号の一覧表)
  - 7.高津邑鈴木半兵衛の算額
  - 8.観音寺境内の戦没者墓碑一覧(個人と合同の慰霊碑の銘文)
- = 会員のそのほかの活動 =

5月2日(日)高津の調査

午後1時より10名の有志が参加し、高津の史跡調査をしました。

・主な調査箇所: 観音寺霊園(戦没者供養塔・各家の墓塔・躑躅園寄進碑など)・高津比咩神社境内の末社祠・出羽三山碑・大日様(天塔念仏)・西霊園(墓塔)・朝鮮人虐殺被災地(こぶしの木)・疱瘡神碑・馬捨て場跡など



5月30日(日)谷中の長明寺

畠山・小菅・森山・増田・蕨の5名で、間宮家系譜調査のためその菩提寺である谷中の日照山長明寺を訪ね、間宮庄五郎家の墓石碑文の調査をしました。

6月5日(土)高津の調査

午前中、会員相互に連絡をとりあって、高津調査のグループワークをしました。

石造物調査グループは、8時半から5名で、観音寺と高津比咩神社境内の石造物を記録しました。

飯縄神社に算額を奉納した記録がある「高津村半兵衛」を調査している佐久間会員と一緒に、民俗調査グループ(蕨・成瀬・石井)は、4名で、高津の旧家半兵衛家で聞き取りや位牌、過去帳の調査をしました。

その後、観音寺墓地へ赴き、石造物調査班と合流。半兵衛家の墓石を調査し、終了後、情報交換をしました。

7月19日(月)高津の調査

臨時に呼びかけた現地調査でしたが、9名の会員が観音寺駐車場に集合し、午前8時半~11時40分、石造物調査班に協力して、宮前の庚申塔11基と二十三夜塔1基の記録を行いました。



また、「疱瘡神」石碑、中村と西の境の「北向道祖神」、中村の「妙正大明神」碑の調査や、消防署横の庚申塔についても調査、また大六天社の由来についての旧家の聞き取りなどを行いました。

7月31日(土)  
高津比咩神社のオコモリ

民俗調査班の蕨・成瀬・中島の3名で、高津比咩神社の毎月晦日のオコモリに参加し、旧家のおばあさま方から昔のことや石造物の由来、民俗行事について教えていただきました。

・オコモリでの唱えの神仏と神社境内の末社の関係

・宮ノ前の庚申塔・二十三夜塔

・観音堂の虚空蔵様の移動元

・その他石造物や祠の由来

(以上 蕨由美・記)

6月23日(水)  
東京成徳大学で

会員2人が特別講師  
畠山隆

保品にある東京成徳大学人文学部は、これまで地域の歴史や文化の調査・研究に力を注ぎ、地域住民にも門戸を開いている大学として知られていますが、このほどその活動の柱である房総地域文化研究プロジェクト第5回公開講座が同大学のキャンパスで開催され、当歴史研究会会員の酒井さん、蕨さんのお二人が、大勢の学生と一般市民の前で特別講師を勤められました。

今回の講座は「地域を学ぶことのおもしろさ」というテーマで、市民研究者が日々調べ、学んで新しい発見をしていく楽しさ、おもしろさを学生達に伝えたいという意図で企画されたもので、当会のお二人に講師招へいの強い要請があったものです。

酒井さんは、八千代の自然観察グループ活動について、ご自分が解説されているワイワイTV制作のビデオを見せながら、わずかに残っている谷津の樹木・野草や昆虫など自然観察のおもしろさを丁寧な口調で語り、あわせて環境保全の大切さを呼びかけました。

また蕨さんは、前半は当会の活動を紹介しつつグループ調査の楽しさを、後半はご自身のホームページ「さわらび通信」の豊富な映像をプロジェクターで投影しながら、やや早口に熱のこもった解説をされました。ホームページの大きな利点として情報がリアルタイムで伝わることを、武石三代王神社近くの工事現場写真を掲示板に載せた翌日、すぐ反応があったこと等を例に挙げながら学生らに強調されていたのが印象として残りました。

講座の終わりに傍聴に来ておられた村田会長が紹介され、当会これまでの活動、成果をさりげなく学生ら皆さんにPRされ、万雷の拍手で締めくくりとなりました。

この日は本会にとっても、日頃の地域活動に大学機関と協同して参画できた意義のある一日であったと思われまます。

## 研究視点の参考

村田一男

日本歴史学会編集「日本歴史」2004年6月号(第673号)には、小特集<由緒書の史料論>が特集されているので高津研究視点の参考にしたい。

巻頭の「小特集にあたって」という『日本歴史』編集委員会の特集説明文には次のようにある。

「1980年代以降、近世史研究のうへでは「由緒」に着目した研究が進展した。それまでは、その内容が史実として信を置けない場合が多いものとして、由緒(書)について正面から取上げられることは少なかったが、新たな視角から村社会・地域社会像を見直そうとする問題意識のなかで、村や地域のアイデンティティや歴史意識のあり方などを探る素材として、由緒(書)が積極的に取上げられるようになったといえる。これによって、とりわけ近世後期には、村や町はもとよりイエや個人、そして様々な集団が由緒をかたる状況が広く出現していたことが認識されるに至った。そうした状況を捉え、18世紀後半から19世紀は「由緒の時代」といわれるようになった(久留島浩「村が『由緒』を語るとき」久留島浩、吉田伸之編『近世の社会集団』山川出版社、1995年)。

一方で、近世前期を対象とした成果も出されており、現時点での由緒(書)研究の到達点と課題については、最近刊行された井上攻著『由緒書と近世の村社会』(大河書房2003年)のなかで丁寧にまとめられているが、同書でも指摘されているように、これまで由緒書の史料学的研究は必ずしも充分ではない。そこで本特集は、由緒書が成立する背景、由緒書の構造や変容について、旧記や先祖書等も含めた事例の分析・検討を通じて、由緒書を史料学的観点から論じてみようとする、・・・以下略」

山本栄治氏(信州大学人文学部教授)は、「村の由緒、イエの由緒」と題して論じている。(以下抄出)

「由緒をキーワードに村の歴史を考える研究は、1980年代後半以降、盛んに行われている。そして18世紀後半から19世紀にかけて、広範に由緒が語られることが明らかにされている。」「最近では近世中期以降の村落および地域社会を究明する際に、由緒が有効であることを

自明の前提として想定されるほど、由緒の研究は近世史では認知されたかの観がある。」そうである。そして由緒という言葉が、なぜ近世に於いて語られるのか、その発生は必ずしも判然としていないという氏の認識にたつて、氏の別の書で「17世紀後半、具体的には寛文印知において東照大権現を究極の権威として淵源させることで、由緒が伝統化するのではないかと」述べられたが、これは「領主と民衆との関係を基軸にして役割負担回避の根拠としての由緒の機能であり、いまだ村およびイエの由緒を発生史的に捉えたものではない。」ことに論拠をすえられている。

そして、中世の惣村でも由緒は語られた例として、文安2年(1445)近江国菅浦の置文が語る隣郷との境相論で勝利したという先行研究を取上げ、「自らの中に語られていたはずの中世の由緒は、どのように権力者を権威の中心として他律的に語られる近世の由緒へと変貌するのだろうか、それはいつごろか」と論を進められている。

そこで、「甲斐国巨摩郡鮎沢村」の由緒書を検討し、「百姓のイエおよび近世の村の成立と由緒書の成立は軌を一にしていること」しかも、「由緒書の作成には、偽文書をも含む中世文書が利用されている」ことなどを指摘されている。

この由緒書は、寛永10年(1633)2月、鮎沢村の北村与右衛門が「甲斐国巨摩郡鮎沢村比(北)村氏謂事」という一冊の「由緒書」を書き残したもので、百姓レベルで書き残された「由緒書」としては、きわめて早い事例に属する。その上、「北村与右衛門が最初に寛永10年に作成してから、以後16代当主北村スマ子が昭和56年(1981)に書き込むまで、時々当主が北村家の由緒を綴り続けたことに特徴がある。」というもので、350年の長きにわたって書き続けられた古文書であり、北村家にとって今も生き続けている「現用文書」と位置付けられている。

北村与右衛門が書いた由緒書の冒頭には「一、鮎沢村井上民部と申者、調衆御役を相勤罷有候、・・・以下略」と書き出されている。

北村家の初代は鮎沢村井上民部であり、民部は、戦国大名武田家の「調衆役」を勤めた。調衆とは、武田家が郷村単位に賦課した棟別銭の納入責任者のことだそうである。後継者はその後、小姓から役大工へ

と出世したが、甚右衛門のとき、武田家への棟別銭の勘定が滞り、闕所処分となり、元龜3年(1572)に死去し、井上家の直系は退転し潰れてしまった。弟の縫之丞(古縫之丞)は武田家への忠孝により処罰は免れ、北村の苗字を名乗ることを認められた。

跡を継いだ縫之丞は、不調法のため役大工を勤めることがかなわず、百姓として鮎沢村の名主を勤めたが、慶長16年(1611)に死去した。縫之丞の惣領がこの「由緒書」を作成した与右衛門であった。与右衛門には子がなかったため弟の甚右衛門に家督をゆずり、寛永13年に死亡している。「後継者のいない与右衛門が、遺跡を弟の甚右衛門に託すにあたり、北村家の由緒を書き残す目的で、本史料を作成したのである。すなわち作成動機は、北村というイエの継承にある。」とこの由緒書の動機が論じられている。そして、由緒書の物語は、登場する調衆井上甚右衛門と役大工縫之丞については古文書により実在が裏づけられているので、大筋において実際の事実に基づいていると判断されている。

その古文書とは、「棟別改日記」という戦国大名武田家時代に現用されていた文書で、幕藩体制においては必要でなくなった非現用文書であるが、調衆であったというイエの系譜を確実に中世にまでさかのぼることができ、由緒を語る根拠としては十分に機能を果たし、由緒を語る際の重要な要素は、イエ意識の萌芽にあるという。

「百姓のイエの確立とは、百姓自身を中核とする近世の村の確立でもある。それは、かつては武士と百姓との間に存在していた社会的な流動性が損なわれて、しだいに近世社会が制度的に固定し伝統化していくことを意味するのである。」と結論を述べられている。

思うに高津新田の由緒は、諏訪神社の本殿礎石に刻された碑文にあり、神社がムラのアイデンティティを示していた。このことに思いをはせると、高津では旗本間宮氏を祀ったという行為は、近世高津村の成立に関わるムラの由緒やイエの由緒に関係するのだろうかという疑問から論文紹介をした次第である。

編集後記：

充実した高津研究と、猛暑の夏でしたね。寄稿ありがとうございます。By.ゆみ

[QWR07752@nifty.ne.jp](mailto:QWR07752@nifty.ne.jp)